

近代日蓮伝記絵馬の比較

望 月 真 澄

はじめに

近世から近代にかけて現代の日蓮伝記の基本となる日蓮伝記本がいくつか刊行された。これは、文章を主体とする伝記であるが、他に絵を主体とする日蓮伝記があり、窪田統泰画『日蓮聖人註画讃』（以下、『註画讃』と略記）がその代表的作品とされている。これ以降、近世から近代にかけて文章と絵で構成された伝記がいくつか作成されていく。

本稿では、絵を主とする日蓮伝記を研究対象とするため、絵馬で画かれた日蓮伝記に注目してみた。具体的には、歌川派の系譜を引く歌川国秀という絵師が画いた日蓮伝記絵馬を取り上げ、絵伝記の役割について考察してみたい。

一 歌川国秀の日蓮伝記絵馬の存在

国秀の日蓮絵伝記に関わる作品について、筆者が所在調査を行った結果、次の十カ所の寺院で確認できた。

表1 国秀作日蓮伝記絵馬一覧

1	駿東郡長泉町法泉寺	連作	明治十四年九月一二日
2	沼津市土肥清雲寺	連作	明治二十三年
3	沼津市大諏訪榮昌寺	連作	明治二十五年七月
4	沼津市青野妙泉寺	連作	明治二十八年～四十年
5	沼津市平沼法華寺	連作	明治三十九年 ※
6	沼津市東間門妙伝寺	一点	明治時代
7	西伊豆町法雲寺	一点	明治時代
8	三島市円明寺	連作	明治時代
9	御殿場市蓮静寺	連作	明治時代
10	裾野市車返祖師堂	連作	明治時代

※5は、他に明治二十五年絵馬あり。

国秀は、地方絵師として駿河・伊豆地方の郷土の作品を手がけているが、日蓮の絵馬に関してもに明治十四年（一八八二）から同三十九年（一九〇六）の約二十五年間にわたり作品を遺していることがわかる。そこで、これから国秀の画いた絵馬の構図・場面の特徴をみていくことにする。

二 土肥清雲寺絵馬（題名）と小川泰堂『日蓮大士 眞実伝』挿絵題名・本文との比較

検討する清雲寺絵馬は表1の2で明治二十三年十一月に画いた作品である。なお、絵馬には、清雲寺の檀信徒の施主名が個々の絵馬に記されている。

『日蓮大士眞実伝』（以下、『眞実伝』と略称）挿絵の特徴について、考察を加えたが、『眞実伝』挿絵九十四点と清雲寺絵馬九十点の題名を比較すると、

ほとんど同じ題名のもの	四十点
題名がほとんど同じであり、同じ場面であるもの	十五点
題名は同じではないが、同じ場面と思われるもの	十三点

と、三種別となり、これらを合わせると六十八点で、全体の三分の二が同じ場面となる。つまり、『眞実伝』の挿絵を取り入れ、同書の本文の内容を底本にしたことがわかる。⁸⁾

次に、清雲寺絵馬の内『眞実伝』で紹介されることのない場面の題名をみていくと次の二つが挙げられる。

27)「高祖沼津海辺之辻堂二、誦経在シケル二、龍灯現ル」をみると、「後年、中老僧但馬房日実、山本重安が宅地を寺とし、龍王山妙海寺と号し、また斉藤利安も家を転じて満松山妙覚寺といふ。両寺共に毎年正月八日、法会を修して昔の

式法を残すとぞ。」（『眞実伝』三卷本文¹⁰⁾）とあるように、『眞実伝』には、沼津妙海寺、同妙覚寺の記事がみられる。また、深見要言『本化高祖紀年録』（以下、『紀年録』と略記）では、「高祖誦経龍灯現」の挿絵が登場しており、この伝記本も参考にしたと考えられる。

同書本文にも「（正嘉二年）高祖御歳三十七。正月駿州にゆきたまひ、沼津の駅に宿し給ふ、経を誦して八大龍王に供じ給ふ。」と、日蓮三十七歳の折に後の沼津駅を通行し、八大龍王に読経したことを記している。¹¹⁾

38「普門高祖ノ許ニ来リテ、所図セシ、二尊ノ点眼ヲ請フ」をみると、『紀年録』に「高祖普門所図二菩薩点眼」「弘長元年辛酉六月日 日蓮在判 南禅寺普門筆 朱印有之」「高祖与自像普門」の三点という多くの挿絵を取り込んでいる。文言も同じ用語を頻繁に使用していることから、清雲寺絵馬は『紀年録』の内容を盛り込み、引用したと考えられる。この二点の場面は、駿河国、伊豆国の出来事で、いずれも静岡県内の話題となっており、伊豆国内の寺院に作品を納入することから国秀が地元の話題として取り上げた場面と考えられる。

次に、清雲寺絵馬の内、『眞実伝』挿絵には登場しないが本文の題名・内容に記されているものをみてみたい。以下、清雲寺絵馬、『眞実伝』題名、同本文の順に記す。

近代日蓮伝絵馬の比較（望）

- 28 「高祖岩本実相寺ノ経藏ニ入テ大藏経ヲ閲覽シ給フ」
 「高祖駿州岩本実相寺の経藏に入給ふ」（三卷二章）
- 34 「高祖吉田兼益ニ就テ神道ノ秘訣ヲ伝達セラル」
 「吉田兼益より神道伝授」（三卷三章）
- 37 「高祖漁夫弥三郎夫婦ヲ教化シ給フ」
 「漁者弥三郎篠見が浦に高祖の危難を救ふ」（三卷十章）
- 44 「市ヶ坂ノ雪中老婆綿帽子ヲ供シ奉ル」
 「市が坂の雪中に老婆綿帽子を供養」（三卷十八章）
- 48 「高祖甲州ニ教化シテ富士登山経ヶ嶽ノ古蹟」
 「甲駿に遊化して富士山に登給ふ」（四卷三章）
- 50 「高祖田邊ケ淵ニ雨ヲ祈リテ現証ノ利益ヲ得給フ」
 「高祖田辺が淵に雨を祈り給ふ」（四卷五章）
- 53 「高祖鶴ヶ岡八幡ヲ諫曉シテ正法ノ威力ヲ示シ給フ」
 「鶴岡八幡宮を諫曉して正法の威力を示し給ふ」（四卷八章）
- 56 「文永八年九月十二日夜鎌倉殿中ニ怪事アリ」
 「又鎌倉御所においても、殿中屋鳴震動ただ事ならば、これ日蓮を害するゆゑならんと、身の毛を立ておそろしがりしば（後略）」（四卷本文）
- 61 「難風ニ遭テ角田ノ岸ニ着船シテ図チズ毒蛇ヲ度シ給フ」
 「海上の激波に題目を書て竜神観応」（四卷十四章）
- 69 「日朗赦免状ヲ持テ佐渡ニ渡海シ給フ」
 「日朗赦免状を以て佐渡に渡海」（五卷二章）
- 71 「執権時宗高祖ヲ館ニ召テ懇懃ニ応接シ給フ」
 「鎌倉殿大士を館に召て懇懃に応接」（五卷四章）
- 72 「執権北条時宗高祖ヲ宗門弘通ノ免状ヲ賜ル」
 「法華宗弘通の免状を賜はる」（五卷五章）

- 74 「高祖甲斐国波木井実長ノ方ニ赴キ給フ」
 「大士甲斐国波木井実長の方へ趣き給ふ」（五卷六章）
- 75 「高祖甲州小室山ニ善智法印ト法力ヲ競ブ」
 「小室の善智大士を毒殺せんと謀る」（五卷十一章）
- 77 「甲州八代山梨両郡ヨリ信州葛木ニマデ遊化シ給フ」
 「八代山梨両郡より信州葛木まで遊化」（五卷七章）
- 80 「七面大明神身延山ニ示現シ給フ」
 「七面大明神示現影向」（五卷十五章）

この十六場面の中で、44、56、61の場面を検討してみたい。44の場面は『日蓮大聖人御伝記』（延宝九年刊）に「市坂窟」、「紀年録」に「高祖入市坂窟」の挿絵があり、両伝記を閲覧した可能性がみられる。56の場面は、泰堂が取り入れた地域の怪異現象であり、『真実伝』の特徴となる場面構成である。なお、この場面は、題名として登場しないが、本文に記されている箇所である。61の場面も『紀年録』に「高祖呪七頭蛇之害」の挿絵として大きく取り上げられていることから、国秀は『紀年録』を参照したことが考えられる。これらのことから、国秀は『真実伝』以外に近世の日蓮伝記本を読み、絵馬を作成したことがわかる。

三 国秀作日蓮伝記絵馬と『真実伝』挿絵題名・本文との比較

国秀の表1日蓮絵馬作品の中でも、絵馬の総点数の関係

で、多い物、中間の数量の物、少ない物、の三種類を選び、絵馬の構図の特徴をみていくことにしたい。具体的には、表1の5 沼津市法華寺七十五点、同10 裾野市車返結社祖師堂四十四点、同9 御殿場市蓮静寺二十三点、を取り上げ、『真実伝』や他の日蓮絵伝記と比較検討してみたい。

法華寺絵馬の特徴をみると、総点数七十九点の内、『真実伝』と同じ構図で二組あるものをみると、法華寺絵馬は、七十五点で清雲寺の絵馬数と比較すると少ない。絵馬の題名にしても『真実伝』とほとんど同名が多く、『真実伝』を参考に絵伝記を作成したと考えられる。その中で同じ構図があり、二枚に画かれているものは、次の42から76の絵馬四点である。

42 「老婆胡麻の餅を捧げて今生の面別を歎事」

61 「宗祖大士御法論石之事」

68 「南無七面大明神示現影向事」

76 「宗祖大士 武州池上ニテ弘安五年十月御入滅之後御真骨申斐国身延山江奉送道中御行列之図」

これら四点の構図は、日蓮伝記の中で国秀が特に注目した箇所だと考えられ、61と68は奇瑞の場面である。また、76の絵馬には「施主 当村興左衛門 明治廿五年七月」と墨書されていることから、明治二十五年（一八九二）の折に画かれ、この時又はその後他の三点の絵伝記も画かれたと考えられ

る。つまり、明治二十五年から同三十九年の間にこの四点の絵伝記が画かれ、その後、明治三十九年に七十五点の絵馬が作成されたと考えられる。

次に、車返祖師堂絵馬の特徴をみると、総点数四十四点の内⁽¹⁶⁾祖師堂の絵馬のみに登場する場面をみていくと次に掲げた八場面となる。この中で、国秀の絵馬として特徴づけられる12、17、43をみていきたい。

11 「磯長叡福寺聖德太子の御墓に詣て法運を祈り給ふの図」

「聖德太子の御墓山に詣給ふ」（二巻題名）

「高野を下山なし給ひ、これより道を河内に求め、当国石川郡太子村なる、磯長の永福寺（叡福寺）に、聖德太子の御廟を拝給ふ（後略）」（『真実伝』一巻本文）

12 「高祖伊勢大神宮参詣之節浄明寺ニ於て妙見尊出現の図」

「伊勢の神廟に靈瑞」（『真実伝』二巻題名）

「これより暫時浄明寺にとどまりて、日に日に神廟に詣て法業の読経いと尊く聞えける。」（『真実伝』二巻本文）

17 「高祖始めて鎌倉に在て鶴ヶ岡の経蔵に入り一切経を拝するの図」「房州清澄、南都の薬師寺、下総土橋東漸寺、鎌倉鶴が岡と四度まで、一切経蔵に入てこれを考へ置たり」（『真実伝』三巻本文）

25 「高祖小松原の大難を通れ山に宿した老母錦を献じ給ひしの図」
「此山坂の雪踏分、齢ひとたけ□しひとりの老婆、念珠を杖に持そへて、漸くここに登り来つ、この洞をさし覗き、しばし驚きたる体なりしが、我は此郷の土生神へ、日参の歩行を運ぶも

のにはべり、御身いかなれば雪に埋みし此祠に、夜を明し給ふぞよ、見まゐらすれば、御額に疵もあり、此雪風の疵口に入ば、御為あしくはべらんにと、自身被し綿帽子を脱で、大士に奉る、大士はこれを押しただき、御疵を覆ひ給ひける、これ当来今の世に、高祖の像に御綿を着奉る、事の始めと知れけり」「市が坂雪中老馬綿帽子を供養」（『真実伝』三卷本文）

32 「北條時宗病中に不審の夢に感し高祖に赦免之事を下知するの図」

「執權時宗靈夢を感じて大士を赦免」（『真実伝』五卷題名）

36 「善智法印高祖を毒塞せんとして却て化導を蒙むるの図」

「小室の善智大士を毒殺せん」と謀る」（『真実伝』五卷題名）

38 「高祖甲州休息山に至り辻の説法と法論をなされ給ふの図」

「夫より北原を過給ふに、胎藏寺といふ真言の寺あり、地藏堂の側の石に、しばし休らひ存したるに、畑うつ農夫、秣刈村童など、立寄りければ、高祖安国論を取出して説法なし給ふに、信心を発し、題目を唱ふるもの多し、それより此地を休息村といふ」（『真実伝』五卷本文）

43 「陛下より雨乞の利益を賞し高祖並に朗師像師へ菩薩号を給わするの図」

「御弟子大覚大僧正妙実、その後を継給ひ、時に文和元年六月二十五日、人皇九十九代、後光厳帝、御宸翰を染させ給ひ、日蓮大菩薩と勅号ありて、僧正妙実に下賜りける」（『真実伝』五卷本文）

12 は、『真実伝』に、「伊勢の神廟に靈瑞」（『真実伝』二卷題名）、「これより暫時浄明寺にとどまりて、日に日に神廟に詣

て法楽の読経いと尊く聞えける。」（『真実伝』二卷本文）とあるのみで、妙見尊（妙見大士）出現のことは『真実伝』に詳しく記されていない。妙見大士の出現に関しては、『紀年録』『日蓮上人一代図会』にみられる。両伝記では妙見大士出現に関する挿絵があることから、両書のどちらかを閲覧してこの絵馬を作成したと推察される。

17 の場面も『真実伝』に、「房州清澄、南都の薬師寺、下総土橋東漸寺、鎌倉鶴が岡と四度まで、一切経蔵に入てこれを考へ置たり」（『真実伝』三卷本文）と、岩本実相寺の経蔵入蔵の話や挿絵は登場するが、この箇所は、本文にのみ登場する内容であり、国秀は『真実伝』本文を読み込んでこの場面を引用したことが考えられる。

43 の場面は、大覚の雨乞祈禱の効験によって三菩薩号を後光厳帝より賜ったという、日蓮滅後の教団発展の内容を取り入れている場面である。これは『御伝記』第十一巻に、

11 の 14 「大覚はじめて日像の弟子と成給事」
11 の 20 「後醍醐天皇の法華宗の論旨の事」

とあるように、日像、大覚に関する挿絵がみられることから、同書の影響を受け、絵伝記の場面に三菩薩号のことを取り入れたと考えられる。⁽¹⁸⁾

次に、表 1 の 4 沼津妙泉寺絵馬をみると、

- 1 「蒙古退治図」 明治二十八年十月
- 2 「小松原法難図」 明治三十年一月十五日
- 3 「星降示現図」 明治三十年七月一日
- 4 「佐渡波題目図」 明治三十年七月二十八日
- 5 「龍口法難図」 明治三十九年十一月三日
- 6 「身延山參詣図」 明治四十年一月十日 ※女性七人を画く
- 7 「七面大明神図」 明治四十年一月十日

この七点の絵馬から、これらを画いた時期は、明治二十八年から同四十年の十二年間に亘っているが、その順番も、「蒙古退治」という奇瑞場面を最初にあげ、それ以降の二から七まで国秀は日蓮伝記の古い場面から画いている。

次に、表1の9御殿場蓮静寺絵馬と歌川国芳「高祖御一代略図」の比較を行ってみることにする。蓮静寺絵馬は総点数二十三点、と他の国秀絵馬に比較して場面が少ない。浮世絵として著名な日蓮絵伝記とされている「高祖御一代略図」十場面と比較すると、八点の場面が同じ構図となっているが、小松原法難以降の法難・奇瑞の場面を中心に描いていることがわかる。なお、国芳と同じ八点以外の二点も奇瑞の場面を取り込んでいる。

- | | |
|---|----------------|
| 蓮静寺絵馬二十三点 | 高祖御一代略図(国芳) 十点 |
| 1 高祖御誕生 ^(有来由) 祥 ^(有来由) □ ^(有来由) 之図 | |
| 2 高祖誕生無益殺生誠之図 | |

近代日蓮伝絵馬の比較(望月)

- | | |
|----------------------------------|-----------------|
| 3 高祖御別髪之図 | 1 「東條小松原」 |
| 4 高祖於清澄堂諸宗邪飛説教図 | 3 「相州龍之口御難」 |
| 5 高祖比叡山大乗論義之図 | 4 「依智星降」 |
| 6 高祖比叡山三十番神の図 | 5 「佐州流刑角田波題目」 |
| 7 高祖於松葉ヶ谷靈猿奇瑞ノ図 | 6 「佐州塚原雪中」 |
| 8 高祖 ^(有来由) 吉田兼益神道伝達之図 | 7 「小室山法論石」 |
| 9 高祖伊豆国伊東御流罪図 | 9 「身延山七面神示現」 |
| 10 高祖小松原御難之図 | 10 「上人利益蒙古軍敗北」 |
| 11 高祖刑場跡之途中老婆餅ヲ捧図 | 2 「鎌倉靈山ヶ崎雨祈」 |
| 12 高祖固瀬龍之口御法難之図 | 8 「甲斐国石和川鵜飼亡魂化」 |
| 13 高祖龍之口御赦免狀行合川之図 | |
| 14 高祖救護ノ御明星依智の図 | |
| 15 高祖角田峰毒蛇降伏之図 | |
| 16 高祖海上波題目書頭ノ図 | |
| 17 高祖佐渡塚国塚原問答図 | |
| 18 高祖般若才天本尊授与ノ図 | |
| 19 高祖流罪赦免執權時宗靈夢之図 | |
| 20 高祖法論石之図 | |
| 21 高祖身延山七面大明神示現影向図 | |
| 22 高祖御旗曼荼羅蒙古退治之図 | |
| 23 高祖池上御入滅之図 | |

まとめに

国秀は、六十七歳で生涯を閉じるが、地方に遺した作品は

明治中・後期という時代であった。今回は、国秀のいくつかの日蓮伝絵馬を泰堂の『真実伝』と比較検討したが、絵馬の構図・題名の考察から『真実伝』を読み込み、これを底本として絵馬を画いたようである。特に、『真実伝』の挿絵を絵馬に写し込んだが、挿絵箇所に限ることなく本文を忠実に再現し、必要な場面は新たに画いたことを確認できた。また、地方絵師として地域で起きた出来事を積極的に取り上げた。この絵馬の構図の選択が、施主寺院の依頼なのか、国秀の考えなのかについては現段階では明らかにならない。

国秀の絵馬が作成された日蓮教団の宗教的背景を考えると、国秀画の日蓮伝絵馬の初見は明治十四年（一八八二）である。翌十五年がちょうど日蓮の六百遠忌に当たっており、この時期に日蓮伝絵馬が静岡県東部地方で盛んに作成されたことが明らかとなった。

近世に日蓮伝記本が多く作成されたが、近代においては絵を主とする日蓮伝記が盛んに作成された時代となる。つまり、近代以降の日蓮伝記の特徴は、絵を主体とする絵伝記が多く作成された時期で、絵のみの絵伝記も多く登場した。国秀の作品に代表されるように、全国各地では地方絵師が画いた絵伝記が確認されているが、その作品の中には、明治十五年の六百遠忌の記念として寺院から依頼があつて画かれた状況が窺える。今後は、未調査の国秀絵馬や近代に作成された

他の絵伝記を比較検討した上で、国秀作品の特徴を示し、近代という時代における日蓮伝絵馬作成の意義について明らかにしていきたい。

- 1 挿絵が入った日蓮伝記本の代表は、①作者未詳『日蓮聖人御伝記』（一六八二）、②深見要言『本化高祖紀年録』（一七九三）、③中村経年『日蓮上人一代図会』（一八五八）、④小川泰堂『日蓮大士真実伝』（一八六七）であり、特に④は近代以降に再版されていることから当時の著名な日蓮伝記として知られていた。
- 2 国秀は三代豊齋国貞の門人で、墓所は、沼津市内の日蓮宗妙覚寺内にある。墓碑に「法号寛應院光順信士、明治四十二年五月六日。画号一雲齋国秀菊池金平 行年六十七歳」とある。
- 3 国秀の作品については、拙稿二〇一八に紹介した。
- 4 静岡県東部を中心とする地域に遺した国秀作品を紹介した論考に長澤一九八三がある。
- 5 表1の1法泉寺と同表8円明寺の所蔵される絵馬は、国秀とされているが、現段階で未調査であり、今後事例に加えたい。
- 6 栄昌寺絵馬は、国秀の作品と断定できない点がある。
- 7 拙稿二〇一一。挿絵の特徴として、江戸に流行した江戸の祖師霊場の三つの場面を取り入れていることや日蓮の足跡における地域の風景を画いている場面が紹介されている点を検討した。
- 8 65「龍口法難」の場面で、「一般的な地名「片瀬」の文字を『真実伝』では「固瀬」と表記しており、清雲寺絵馬でも同字を踏襲していることからして、『真実伝』を底本に絵馬の構図を考えたことが知られる。

9 本稿で引用した『真実伝』挿絵・各絵馬題名に付された番号は、筆者が整理したものとする。

10 『真実伝』に関する出典は、慶応三年（一八六七）刊『日蓮大士真実伝』五卷（筆者所蔵本）の巻数を記すことにする。

11 同書本文の頭注にも、「弘安巳卯高祖大士本尊を兩人にたまふ一の法号をもつて兩人にあたふて日安といふ、後中老日実一字を山本氏の屋しきに創す、八大竜王守護山妙海寺と号す、斉藤氏出家し宅を變じて精舎とす、満松山妙覺寺と号す、平氏の法号を取る兩寺今に至て八日堂修法あり」（頭註、一二七一―一二八頁）とあり、編輯者の要言は、この事項に関して調べ上げていたことがわかる。

12 深見要言『高祖累歳録』の挿絵題名をみても「高祖日天子開眼」とある。

13 『日蓮大聖人御伝記』に「市坂窟」、『紀年録』に「高祖入市坂窟」の挿絵がある。

14 56は題名には登場しないが、本文に記されている箇所である。

15 『紀年録』に「高祖呪七頭蛇之害」の挿絵がある。

16 車返祖師堂の絵馬は、四十四点で破損状況が激しいものもあり、全体の点数からして失われている可能性もあると思われる。

17 車返霊場の日蓮伝記絵馬は、拙稿二〇〇八に一覧表として紹介したので参照されたい。

18 この伝記本は十巻本で、後で一卷付け加えられて十一巻となったものである。

〈参考文献〉

- 長澤利之「絵師・歌川国秀の生涯——郷土に生きた浮世絵師——」
『沼津市歴史民俗資料館紀要』第八号、一九八三
望月真澄「資料紹介 車返霊場関係資料」『身延論叢』第一三号、二〇〇八
望月真澄「幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察——小川泰堂著『日蓮大士真実伝』を中心に——」『印度学仏教学研究』第五九卷第二号、二〇一一
望月真澄「近世の日蓮伝記絵馬について」『宗教研究』第九一卷別冊、二〇一八

〈キーワード〉 日蓮、絵馬、国秀、日蓮伝記

（身延山大学教授・博士（文学））